



国際交流員や外国語指導助手、通訳など、中央区で国際交流を担っている外国人の方三人に、札幌での生活や自国との生活の違いなどについて語ってもらいました。

外国語指導助手

(Assistant Language Teacher)

市立中学、高校で英語教師のアシスタントとして、語学指導に携わっています。

現在、本市ではアメリカのほかイギリス、オーストラリア、ニュージーランド、カナダから来た23人が、生徒のコミュニケーション能力の育成や相互理解の増進に大きく貢献しています。

ロイさんはアメリカの短大時代に半年間長沼町でホームステイをし、卒業後、南幌町で一年間中学校の英語教師をした経験があります。その後、故郷の大学を出たロイさんは、平成十一年七月に外国語指導助手として札幌に来ました。

外国語指導助手を志望したのは、日本語が上手になることはもちろん、違う文化を学ぶためです。

現在、旭丘高校に勤めるロイさん。アメリカと日本の生徒の違いについて、アメリカ人は授業中でも積極的に自分の意見を言うため、静かなクラスというのは少ないです。一方、日本の生徒は何事にも一生懸命で、勉強にも大変力を入れていきます。そして、周りにとても気を使うように見えます」と両国の良いところを話します。

中央区についてロイさんは

「中央区イコール札幌という感じで、行きたい所がいっぱいあります。例えば、友人とよくサッポロフアクトリーや狸小路、旭山記念公園に出掛けます。また、すすきのなどにはおいしいお店が多いですね」とその魅力を語ります。

アメリカと日本の習慣の違いについてロイさんは、「宴会が多いのには驚きました。しかし、私も宴会は好きなので苦にはなりません。そのほかアメリカでは、地下鉄の乗降口付近の押し合いというのはないですね」と話します。

また、体の大きいロイさんにとつて日本の住宅は狭く、よくドアの入口に頭をぶつけるので、そこにスポンジを張っているそうです。

さらにロイさんはこう話します。「アメリカにはいろいろな国の人たちが街を歩いていますが、日本ではあまり見掛けませんね」と日本人にはごく

普通の光景でも、ロイさんから見ると違和感があるのかもしれません。

日本人が苦手と言われる外国人とのコミュニケーションの取り方について、日本人はいろいろなことを考え過ぎます。まずは日本人同士のよう

に気軽に話し掛けることが必要」とロイさんはアドバイスをします。

ロイさんは、今年の七月で任期が切れますが、その後はアメリカに戻って大学院に入り、母国で社会科学の先生を目指す。



英語の授業で、パソコンの操作を説明しているロイさん。生徒はロイさんの言葉を聞き逃さないように、真剣に耳を傾けます

ロイ・トーンさん

平成13年7月から旭丘高校で外国語指導助手として勤務。アメリカ・ミシガン州出身